



Freire, E.による無条件の肯定的配慮論 ~ 古典的 クライアント中心派の主要原理 ~

著者	中田 行重, 小野 真由子, 構 美穂, 中野 紗樹, 並木 崇浩, 本田 孝彰, 松本 理沙
雑誌名	関西大学心理臨床センター紀要
巻	6
ページ	89-96
発行年	2015-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10112/8993

Freire, E. による無条件の肯定的配慮論

～古典的クライエント中心派の主要原理～

関西大学臨床心理専門職大学院 中田 行重
小野真由子・構 美穂
中野 紗樹・並木 崇浩
本田 孝彰・松本 理沙

要約

古典的クライエント中心派の論客 Freire, E. による無条件の肯定的配慮についての考え (2001) を紹介し、それについての考察を行った。Freire は、セラピストが自己を出来るだけ脇に置くほどプレゼンスを提供するという彼女独自の理論を基盤に、無条件の肯定的配慮が中核条件のうち最も重要であり、共感的理解と同じであるという、古典的クライエント中心派の考え方を解説している。その他、ここに紹介する論文は2つの事例を掲載しており、無条件の肯定的配慮を具体的に考える上で刺激となる論文である。

キーワード：無条件の肯定的配慮、受容、プレゼンス、自己を脇に置く、共感的体験

I. はじめに

Bozarth, J., Brodley, B. T. など古典的クライエント中心療法の立場の研究者は、中核条件のうち、無条件の肯定的配慮 (unconditional positive regard、以後 UPR と略す) を最も重要視する。その理屈は次のとおりである。クライエント (Client、以後 Cl と略す) は価値の条件を背負って自己概念を作り上げ、経験との間に不一致を生じさせている。セラピスト (Therapist、以後 Th と略す) からの UPR が提供されることで、Cl は自己概念を作り上げる際に分離させてきた経験を受け入れ、自己概念が次第にその経験に近づいて不一致の程度が減っていく。従って、古典的クライエント中心派は、UPR こそが言うまでもなく重要と考える。ところが、パーソン・センタード・セラピー (Person Centered Therapy、以後 PCT と略す) の諸派

tribes (Sanders, 2003) の中には、フォーカシング指向療法 (Focusing Oriented Therapy、以後 FOT と略す) や体験的療法 (Experiential Therapy、以後 ET と略す) のように、Th が Cl の体験プロセスを誘導、指示するものがある。それを古典的クライエント中心派は強く批判するのである。あるいは、FOT や ET が非指示的に関わったとしても、古典的クライエント中心派から見るとそれは道具的な非指示性である (Cain, 1990)。Brodley (1988) は、クライエント中心療法 (Client-Centered Therapy、以後 CCT と略す) と PCT のその他の諸派との違いを、前者は非指示性をそのエッセンスとしているのに対して、PCT は非指示性を道具的に考え、かつそれをセラピーの一部として考えている、という。こうした UPR の重要性、本質性を巡る議論が諸派間の対立点である。

この古典的クライエント中心派の中にも強調

点などに微妙な違いがある。ここでは、その一人、Freire の考える UPR を紹介し、UPR を考えるための参考文献としたい。Freire はブラジル出身であるが、かつては Dave Mearns や Mick Cooper がいて、現在は Robert Elliott がいるスコットランドの University of Strathclyde の教員となり、国際学会 World Association of Person Centered and Experiential Psychotherapy and Counselling で理事や編集委員になって活躍している。以下に紹介する論文では UPR の重要性を論じている。その点では他の古典的 CCT と変わらないが、UPR の治療原理に関して彼女独自の理論を展開している点や自分が担当した事例を紹介している点で興味深い。UPR を考える上で刺激となる論文の1つである。なお、Freire 自身が太文字で示した大見出しをほぼ遵守する形で章立てとし、後の考察の便宜のため、そこに番号を振っている。

II. “Unconditional Positive Regard: The distinctive feature of Client-centred Therapy (2001)” の要約

1. 無条件の肯定的配慮：クライアント中心療法特有の特徴

UPR は CCT における主要な革新的な治療的作用であり、他のセラピーにない特徴である。共感的理解と自己一致はある程度他の学派に取り入れられているが、UPR は CCT 独自のものである。他の学派は UPR のもつパラドックスを取り入れていない。そのパラドックスとは人が変わるためには自分を受け入れなければならない、ということである。つまり、変化するためには自分への UPR をもたなければならない、潜在する成長力を満たすには基本的な有機体的体験を受け入れなければならない。これが Rogers, C. の治療理論の基盤になっている。一般的な感覚で考えると、まず CI が変化するためには CI 自身が頑張らないといけない、Th は何かしなければならぬ、Th は変わろうとする CI の努

力に協力する、というものであろう。そのため、何がどのように変わらねばならないのかということに関して Th による査定と診断が必要という考えにつながる。

心理療法の業界において CCT は特殊でユニークなアプローチとして誕生した。CCT では CI であるその人を無条件に受け入れる。従って Th は CI を変化させようとはしないし、それが目標にならない。CCT は問題中心療法ではない (Bozarth, 1999)。この考えは他学派には理解不能であろう。本論文の目的は CCT におけるこの中心軸を解き明かすことにある。

2. クライアント中心的相互作用：事例リタ

45 歳のリタは水への恐怖症を抱えていた。私は CCT の Th として、彼女を変えようとはせず、パニック行動をも含めて、彼女を無条件に受け入れた。解決を求める彼女に対して、私は彼女の憂うつ感、無力感に寄り添い、彼女の感情を受け入れ続けた。彼女の向かう方向に、彼女のペースに合わせて共に歩き、リタの成長への闘いの中で彼女と共に居続けた。そこに彼女や彼女の感情を変えようという意図は一切なかった。

3 セッション目を過ぎた時、彼女の行動は完全に変化していた。パニックも水恐怖も消えていた。しかし落ち込みは続いていた。次第に彼女は自分に対して違った見方をするようになった。今まで自分は、強く、恐怖などは持たない強い女性だと見なそうと闘い続けていて、本当の気持ちや感情を無視しようとしてきたことに気が付いた。自分の 45 年は全くの嘘の人生であったと気が付いた。セラピーが 3 ヶ月目に入ろうとした頃、彼女はこれらの隠されていた感情を探ろうとし始めた。それは辛く怖い、困難な体験だった。彼女はゆっくり、注意深く探った。私は共感的理解の応答を通して、彼女の向かう方向に、彼女のペースに合わせて共に歩んでいた。

4 ヶ月後、彼女はセラピーをそろそろ止めよ

うと決意した。彼女は恐怖や弱さをもつ自分自身を受け入れ、強い自分であろうとすることを止めた。そうして他人にもオープンになり、対人関係も改善された。彼女は、辛い体験の恐怖を水に置き換えていたと結論づけた。彼女がこれら全てを自分ひとりで決めたことは驚くべきことである。自分の結論を自分のやり方で見つけたのだ。

以上のことで重要なのは、私がCIの実現傾向を信じていたから、彼女の自暴自棄やパニック行動を受容できたということである。

3. 信頼することと受け入れること

実現傾向に関する Th の信頼は、CI に対する無条件の肯定的配慮の体験を支える。実現傾向とは CCT の基盤であり、成長し発達し潜在的な傾向を実現させる人間という有機体固有の傾向である。Rogers のパーソナリティ理論は、取り込まれた価値条件によってこの実現傾向が妨げられる時に心理的不適応が起きると考える (1959)。そのため、CCT の Th の関わりは CI の実現傾向を解き放つ治療的雰囲気を提供すること、つまり CI の経験に対する無条件の受容こそが唯一の目標である。

Th が CI の成長力を信じていると、CI の体験が痛ましくても、破壊的でも、恐ろしいものでも、それを無条件に受け入れることができる。CI への UPR は、CI の実現傾向への信頼の高さによるのである。

とはいえ、経験を積んだ Th であっても、CI の成長力や自己決定をなかなか信じ切れるものではない。CI の体験によっては落ち着いて信じていられなくなるだろう。そうなると、受容しても条件付きなものになりがちである。条件付きになる典型例は CI をリードすることと、CI に支持を与える、という形で現れる。

4. 条件付きの場合

4-1. リードすること

Th が CI をリードする時、CI が面接をリード

するのを私は受け入れませんよ、と言っているようなものである。Th はコントロール感を失いたくなくてリードするのもかもしれない。その時、CI は無条件に受け入れられてないという経験をするのである。

Th がある CI に、CI が抱える孤独について質問をした時、CI はその質問をされたことで、自分が孤独なのが問題なのだと考えてしまった。孤独な自分は受け入れられないのだ、と思った。つまり、こんな簡単な質問にも条件付きの関心であることが表れているのである。通常、Th は Th 自身の照合枠 (frame of reference) からの質問でリードする。そのような質問は CI の探索を Th が選んだ “正しい (appropriate)” 内容に方向付けてしまう。CI に対して Th がこうしなさいと方向性を決めても、あるいはたとえ示唆するだけであっても、それは CI を信頼していないのと同じである。

4-2. サポートすること

CI の実現傾向を信頼出来ないと、Th は自分が CI を何とか成長させないと、というように、その責任を背負ってしまうことになる。CI の体験が恐怖や絶望、混乱など激しいものであると、Th は CI の体験を信頼できなくなり、経験を積んだ CCT の Th であっても、ついサポートしてしまう。不安がる CI を勇気付けたり、混乱した CI に助言をしたり、絶望した CI を慰めたりしそうになりがちである。これらは、CI の体験を条件付きでしか受け入れていないことを示している。

5. セラピスト自身に対する無条件の肯定的自己配慮

Th が自分自身に対する無条件性 (therapist's unconditional positive self-regard、以後 UPSR と略す) をどの程度経験しているかによって、CI への UPR の程度が変わる。防衛的で自分の有機体的体験過程に閉じている人は CI の体験にも恐れを抱きやすい。Th に取り入れられている価値の条件が、CI の受容を選択的なものにし

てしまう。Bozarth (2001) は UPSR が結び目となって中核3条件を高める、と述べた。

6. セラピスト自身の体験を脇に置くこと

CIの照合枠 (frame of reference) を無条件に受容するためには、Thの照合枠を構成する自己 (価値観や欲求、バイアス、期待) を脇に置いておかなければならない。なぜなら、自己がフィルターとなり、他者の体験の中で、価値があると感じ、受け入れることのできるものしか受容できなくなるからである。自己を脇に置いておく有用な方法の1つは、共感的理解を通して返答することである。これによって、Thの照合枠をCIの歩みに干渉させないようにし、無条件の肯定的関心の態度を促進することができる。

7. プレゼンス (Being present)

Rogers は UPR を CI のあらゆる側面を温かく (warm) 受容すること (1957) と定義している。この温かい (warm) の意味であるが、Rogers は冷たい (cold) 受容と区別しようとした可能性がある。(体験を脇に置くといっても) 無関心、あるいは中立的で受身のものであれば冷たい受容になってしまう。そこで、無条件の受容に温かいという質感を加える別の何かが必要である。私の考えでは、UPR に現れる温かさとは Th のプレゼンス (presence) である。そして Th が自己を脇に置くことによって、Th の一層のプレゼンスを CI に提供することになる (Freire, 2000)。CI の体験世界における Th の CI と共にいようとする意欲がプレゼンスとなり、そのプレゼンスが無条件の配慮を UPR に変えるのである。しかし、プレゼンスは押し付けるものではない。CI という固有の存在に対する献身を通じて示されるものである。

8. 事例ダイアナ

小児科から多動症の診断で紹介されたダイアナ。母親はダイアナを「じっとしていることが

なく、もう我慢出来ない」と言う。この時小児科医が薬物処方をしていなかったことは幸いであった。私との週1回の面接で初めの5ヶ月、彼女は同じことを繰り返した。棚にある絵の具を全部引っ張り出してぐちゃぐちゃにした。絵の具を混ぜ合わせ、テーブルや床、自分の手や洋服を汚し、顔や髪の毛までぐちゃぐちゃに汚すことさえあった。絵の具の容器をテーブルに置いたかと思うと、そこに髪の毛を垂らしたりした。彼女はよく私に「おばあちゃんが服を汚さないでと言うから、私は絵を描かないの」と言っていたが、結局いつもひどい汚し方をしていた。プレイルームを出て手や絵の具入れを洗ったり、待合室の祖母に話をしに行ったりすることもよくあった。私は彼女の様子を多動で落ち着きのない問題行動とは見なかった。彼女の行動を変える意図は一切なく、ただ彼女と一緒にいようと思っていた。彼女が初めてプレイルームを出て行った時、Th は何か“まずい (wrong)” ことをしでかすのではと心配になったが、“大事なのは彼女を信じること” と自分に言い聞かせ、彼女が戻るのを落ち着いて待った。実際、彼女は何も問題を起さなかった。手を洗いに行っただけだった。私は彼女を受容することに加えて、私のプレゼンス、私が彼女と本当に共にいること (be present with her) を彼女に示したかった。私はプレゼンスを示すために彼女が実際に口にした言葉、例えば “I emptied the yellow pot” を、“You emptied the yellow pot” と、実際に繰り返した。それは共感の典型的な応答、つまり感情の反射ではない。私は彼女とそこにおいて、彼女が私を自由に使ってよいことを示すために言葉を繰り返すことが必要だった。言葉の繰り返しは、私が自分の内的照合枠から彼女を邪魔することを防いでくれた。最後の2ヶ月、彼女の行動は見事に変化した。絵の具で遊ぶことも部屋を出て行くこともなくなる代わりに、セッション中は粘土に集中し、大きな箱にブロックをきちんと片付けるようになった。この変化は驚きであった。

同様の変化が家や学校でも起きている、と母親が最終回に述べて面接は終わった。

この事例はUPRが実現傾向を進める上で強烈な体験となること、UPRがCIの行動の無条件の受容とCIの体験世界におけるThのプレゼンスによって伝わることを示している。

9. 共感的体験としての無条件の肯定的配慮

1975年、Rogersは“*Empathic: An Unappreciated Way of Being*”においてグループ経験や病院での患者との経験などを通して、より広い共感の定義を提案した。Rogersは共感的なあり方(empathic way of being)は幾つかの様相からなるとした。私は別の研究でこのRogersの定義に3つの様相(facet)があると提示した(Freire, 2000)。それは(1)共感的体験empathic experience, (2)共感的理解empathic understanding, (3)共感的理解の応答empathic understanding responseである。(1)は他人の体験世界に判断せずに入り込むこと、(2)は他人が経験している意味や感情についての理解、(3)はある特定のコミュニケーションモード(Brodley, 1977, 1998)のことである。Rogersはこれら3つを1つの現象のようにまとめて論じ、時に共感を表すものとして交互に使ったりしているが、これら3つは異なるものである。共感的体験(1)が共感的理解(2)につながることもあるし、そうでないこともある。逆に共感的理解(2)が共感的体験(1)につながることもあるし、そうでないこともある。その意味では共感的体験(1)とは、Rogersが1975年の定義の中の次の説明に相当するといえるだろう。

他者の知覚世界に入り込み、全く自由に、……時にはそこに住み、何の判断もせずに動き回り……しばらくの間、自分個人の考えや価値観を脇に置き、他人の世界に偏見なく入り込む。ある意味でこれは自分の自己を脇に置くことである(Rogers, 1975, p.4)。

これを読むと、共感的体験とUPRとは結局1つの同じ体験であるという結論になる。UPRは、

Thは自分のプレゼンスをCIに提示しながらCIの体験のあらゆる面を受け入れる。共感的体験は、ThはCIの世界に入り込みながらCIの内的照合枠のあらゆる面を受け入れる。無条件の受容と共にあるThのプレゼンスというあり方(Being present with unconditional acceptance)と自分自身のことは脇に置いてCIの世界に入り込むこと(entering in the client's world laying her self aside)は結局同じ経験である。Bozarth(1998)も共感とUPRは、本質において同じ経験である(p.58)と述べている。これがCCTの本質である。

III. 考察

Freireは本論文の目的をUPRというCCTにとっての中心軸を解き明かすこと、というようにやや曖昧な書き方をしている。しかし、読んでみると幾つかの理論的な貢献をしている。そのうちの1つが、最後の部分に書かれているものである。そこには、Bozarthの主要な論の1つ、すなわち“共感的理解とUPRは同じ体験である”(1998)ということを経験的に説明することが目的の1つであったことが伺える。そして、プレゼンスという概念を用いて説明しようとした点が貢献の1つである。とはいっても、最後の部分を読んでも、なぜ無条件の受容と共にあるThのプレゼンスというあり方と、自分自身のことは脇に置いてCIの世界に入り込むことが同じ体験なのか分かりにくい。そこで、まずここから考えることで本論文の趣旨を整理する。

6章の「セラピスト自身の体験を脇に置くこと」は、Freireも紹介しているようにRogers(1975)も述べており、またFOTのIberg(1996)もwitnessingという方法を提示しているように、UPRにとって重要なことと考えられている。Freireの独自性は、単に体験を脇に置くだけなら、無関心やあまり関心のない受身の(すなわち肯定的でない)姿勢という場合もある

だろう、と論を展開するところにある。そこで、そのような無関心的で受身的なものでなく温かさが加わるには、プレゼンスが鍵となる、と論を進めている。そして7章“プレゼンス”において、彼女の独自の論である、Thが自己を脇に置くことによってThの一層のプレゼンスをClに提供することになる(Freire, 2000)ということにつながる。ここを押さえておくと、無条件の受容と共にあるThのプレゼンスというあり方と、Thが自分自身のことを脇に置いてClの世界に入り込むということが同じものであることがようやく理解できる。

“事例ダイアナ”において、FreireはThのプレゼンスを示すためにClの感情の反射ではなく、Clの言ったことを繰り返した、と書いている。これもThが自分自身を脇に置き、それがThの内的照合枠からの言動を通してClの体験世界を邪魔するのを防いだ、ということを示している。そして、ここには同時に、ダイアナの言葉をそのまま繰り返すことが、ダイアナの体験世界の中に十分に入り込むことになっている、とFreireは(明確には述べていないが)含意しているのであろう。そう考えると、ここで検討している最終章の議論が納得できる。

Thが自分自身を脇に置くことでThのプレゼンスを提供することになる、という論自体が彼女の理論的貢献の1つであると思われる。これはUPRのパラドックスと同様、パラドキシカルで意義深いものであるが、筆者らとしては感覚的にはほぼ分かる気がしている。しかしそれが、Freireの意味することと同じかどうかは本論文だけでは分かりにくい。

その他の貢献の1つとしては、今述べたように、“事例ダイアナ”でClの言葉を繰り返すことがダイアナの体験世界に入り込む、すなわち共感的体験になっている、と言おうとしている点である。筆者らの推測が正しければ、ここには、Clの言葉をそのまま繰り返すことが、Thの内的照合枠からの邪魔を防ぐだけでなく、共感的体験につながる、ということが含まれてい

る。つまり彼女も書いているように、感情の反射ではなく言葉を繰り返すことがThのプレゼンスを示し、Clの体験世界への共感的体験に繋がる、ということになる。これはPCTのThの言語的応答に関する重要な示唆を持っている。PCTにおける従来のThの主要な言語的応答が、彼女の分類によると(3)共感的理解応答だけのように考えられてきて、それが感情の反射などと呼ばれ、何もかも一緒くたにされていたという。しかし、彼女はClの言葉をそのまま繰り返すことを、感情の反射とは明確に区別し、(1)共感的体験として捉え直した。Clの言葉をそのまま繰り返すことについては、PCTの他の立場の人も重要と考えているが、その意義が異なる点は興味深い。FOTではClの言葉をそのまま繰り返すのはClの体験過程を推進するためであり、Warner(2001)はそうしないと難しいプロセスにいるClは混乱する、というのである。また、Prouty(1994)はpre-therapyを展開している。

その他に、UPRはパラドックスをほらみ、他学派には真似のしようもない革命的な原理と提示し、それを解明しようとしたこと自体が壮大な試みのように思われる。ただこの論文は、他学派が読んでも納得出来ないのではないだろうか。たとえば説明に使われたプレゼンスという概念が分かりにくい。もちろんこれは、Rogers晩年の有名な概念を意識したものであるのは言うまでもないが、プレゼンス自体をRogersもきちんと定義していないためもあって、Freireがここで展開するプレゼンスという考え方がRogersのそれと同じかどうか分からない。これは、彼女の論述がまずいというよりも、扱っている体験が余りにも言語的になじみにくい性質のものであることが1つの理由であろう。しかし、UPRのパラドックスについては、他学派にも分かるような説明を探求する試みは今後も続ける必要があるだろう。

また、2つの事例を掲載していることも評価できる。1つ目は水恐怖の事例、2つ目は“多

動”と紹介されてきた事例である。精神分析や CBT などの学派では理論や技法を凝らして行い、そのような事例に対して、彼女は CI への信頼を基盤に UPR を維持し続けて大きな変化が起こっている。こうした事例経過は、今後さらに PCT の他の Th によって、PCT の内外に向けて提示されるべきであろう。

筆者らが疑問に残った点を最後に書いておく。第 1 点は、彼女が CI を変化させようともしない、と述べている点である。その考え方は本論文でよく理解できるが、心理臨床の現場において、そういう考え方でやっていけるのだろうか、という点である。心理療法は社会的な契約に基づくサービスである。変わりたい、という CI (それがほとんどであろう) に対して、そのような考え方では心理療法の契約そのものが成立しない場合があるのではないだろうか。

第 2 点は UPR の実践そのものに関する点である。この論文は UPR 能力をどう身につけるか、どう実践するかを論ずることが目的ではないらしい。とはいっても、UPR は面接室で Th が内行的に行う行為だけで可能なのだろうか、という疑問が湧く。たとえば、本論文で事例ダイアナにおいて、「彼女が初めてブレイルームを出て行った時、何か「まずい (wrong)」ことをしてかすのではと心配になったが、「大事なのは彼女を信じること」と自分に言い聞かせ、彼女が戻るのを落ち着いて待った」とある。ここで、心配になった、ということは彼女を信じ切れていないのではないかと。あるいは、自分に言い聞かせれば、UPR は出来ることなのか？ 信頼しているつもりになっていることと信頼していることは違うのではないかと。これは、Grant (1990) が非指示性 non-directivity には道具的なものと本質的なものがあると区別したことにも通じる。UPR にもその両方があるだろう。その点、Freire は自分の考えるのは本質的 UPR である、と答えるであろうが、自分に言い聞かせなければならなかったということは、本質的 UPR と言えないのではないかと。などの

疑問が湧く。

これは難しい問いに違いないが、同時に重要な問いでもある。本論文は、事例を率直に提示したからこそ、そのような重要な問いを投げかけてくれた。そういう意味でも本論文の意義は大きいことを最後に述べておきたい。

文献

- Bozarth, J. D. (1998) *Person-Centered Therapy: a Revolutionary Paradigm*, Ross-on-Wye: PCCS Books.
- Bozarth, J. D. (1999) Forty years of dialogue with the Rogerian hypothesis. Paper presented at the 14th Annual Meeting of the Association for the Development of The Person-Centered Approach. Ruston, Louisiana.
- Bozarth, J. D. (2001) Congruence: A Special Way of Being. In Wyatt, G (Ed.), *Congruence*, 184-199, Ross-on-Wye: PCCS Books.
- Brodley, B. T. (1977) The empathic understanding response. Unpublished manuscript. University of Chicago.
- Brodley, B. T. (1988) Untitled article, *Renaissance*, 5(3-4), 1-2.
- Brodley, B. T. (1999) Criteria for making empathic responses in client-centered theory. *The Person-Centered journal*, 6, 108-20.
- Cain, D. (1989) The paradox of nondirectiveness in the person-centered approach, *Person-Centered Review*, 4(2), 123-131.
- Freire, E. (2000) An implemetacao. Das atitudes facilitadoras na relacao terapeutica centrada no cliente. Unpublished masters dissertation. Pontificia Uaniersidade Catolica de Campinas.
- Freire, E. (2001) Unconditional Positive Regard: The Distinctive Feature of Client-Centered Therapy. In Bozarth, J. D. & Wilkins, P

- (Eds.), *Unconditional Positive Regard*, 145-155, Ross-on-Wye: PCCS Books.
- Grant, B. (1990) Principled and Instrumental Nondirectiveness in Person-Centered and Client-Centered Therapy, *Person-Centered Review*, 5(1), 77-88.
- Iberg, J. R. (1996) Finding the body's next step: Ingredients and hindrances, *The Folio: a Journal for Focusing and Experiential Therapy*, 15(1), 13-42.
- Prouty, G. (1994) *Theoretical evolutions in person-centered/experiential Therapy. Applications to schizophrenic and retarded psychoses*. New York: Praeger.
- Rogers, C. R. (1957) The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*, 21(2), 95-103. (伊東博・村山正治(監訳)(2001) カーシェンバウム・ヘンダーソン編『ロジャーズ選集(上)』, 誠信書房, 265-285.)
- Rogers, C. R. (1959) A Theory of Therapy, Personality and Interpersonal Relationships as Developed in the Client-Centered Framework. In Koch, S (Ed.), *Psychology: A Study of a Science, 3. Formulations of the Person and the Social Context*, New York, McGraw Hill, 184-256. (伊東博・村山正治(監訳)(2001) カーシェンバウム・ヘンダーソン編『ロジャーズ選集(上)』, 誠信書房, 286-313.)
- Rogers, C. R. (1975) Empathic: An Unappreciated Way of Being, *The Counseling Psychologist*, 5, 2-10.
- Sanders, P. (2003) *The Tribes of the Person-Centred Nation: A Guide to the Schools of Therapy Associated with the Person-Centred Approach*, Ross-on-Wye: PCCS Books. 近田輝行他(訳)(2007) パーソン・センタード・アプローチの最前線, コスモスライブラリー
- Warner, M. (2001) Empathy, Relational Depth and Difficult Client Process. In Haugh, S. & Merry, T. (Eds.), *Empathy* 181-190, Ross-on-Wye: PCCS Books.